
何部へようこそ！

蓮希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何部へようこそ！

【Nコード】

N3619E

【作者名】

蓮希

【あらすじ】

何部：その部は女子四人男子一人でできている部活である。さて、其処に所属する唯一の男、一年の椿は部長桜のストッパーである。其処の副部長、百合と共に暴走する部長を止めたりと仕事は少ないようで多い？椿と部員四人が起こすコメディー？

何部の存在

データ

杉皮高校 『何でもどんなことでもやります的な部』 通称『何部』

また影では『花の部』とも呼ばれているらしい

部員 五名 女子 四名 男子 一名（俺）
顧問 なし

花の部由来

部員名簿

齋藤	桜	二年一組	女子	部長
あかさき	ゆり			
赤崎	百合	二年四組	女子	副部長
すずかわ	きく			
鈴川	菊	一年二組	女子	
あきがわ	さくろ			
秋川	柘榴	一年五組	女子	
すいせん	つばき			
水仙	椿	同じく一年五組	男子	

桜・百合・菊・柘榴・椿と全て花の名という結果から考えられたと思える。

「つまらないわ」

机に肘をついて窓からぼんやりと外を見つめるのは『何でもどんなことでもやります的な部』通称『何部』の部長、桜さん。

それにはあつと溜息を吐いて桜さんを見つめるのは百合さん。そして形の整った唇から何時もと同じような言葉が俺達の耳に聞こえてきた。

「お前がこんくならない部を考えるからだろーが！桜。一年まで巻き込んで」

そっういう百合さんが素晴らしく素敵な方に見えたのはきつと俺だけじゃない……………筈。

この男勝りな口調の人は、この部の副部長である人。

そんな中、一年三人の中で唯一この部が好きという菊がテーブルの隅でお茶を啜って言った。

「でも、皆さんと出会えたのは桜先輩がこの部を考えてくれたから……………だと私は思っんです。」

良い子だ……………と俺はしみじみと思う。でも俺はこの部に入って楽しい事なんて得に無かった。別に大変だったこともなかった。ようは……………あれだ。活動することが無いのが厳しい。

「……………」

ずっと沈黙を貫き通そうとするのは俺のクラスメートであり、俺の幼馴染である柘榴。

無口だが、話し出すとまた話が長いという女子である。

序に此处で語っておこうと思うが、俺……………水仙椿はこの五人の中で

唯一男子である。

主に俺の仕事は 茶を淹れるか茶を淹れるか桜さんの暇つぶしに付き合うかとかそんな感じである。

序にこの部四人の女子は全員容姿が整っていて誰かから聞いた話だと 理想の美人（桜さん）と近寄りがたい雰囲気ですそれでも素敵（百合さん、柘榴）と可愛い！何この子うちで飼いたい！（菊）この三つの項目でこの部の女子は分けられるようだ。

序に唯一男の俺はこの女子達に囲まれているということで視界にも入っていない…もしくは男子に睨まれるという存在だろう……退部届けだしても良いでしょうか？

「…ねえ、椿。何か楽しいことない？」

「知りません。俺より柘榴に話を振ったほうがきっと楽しいですよ。多分。多分ですがね。まあ俺はコイツとこの何年間という時を一緒に過ごしてきた家族みたいなもんですから、俺的にコイツといるのは楽しいと思いますよ」

そういうと桜さんはそうねと柘榴を見た。すまん、柘榴。俺は桜さんの相手で毎回毎回疲れたんだ。偶には変わってもらっても構わないよな？…多分。

「……………ふざけるな」

柘榴が小さく俺に向かって何かを呟いたのは多分幻聴。絶対幻聴。何が何でも幻聴なんだ。

「桜、柘榴に楽しい話を期待するのはよせ。私は柘榴と三十秒以上会話したことは一度もない」

「……………えと、私は十秒も話してません」

菊。それはお前が柘榴と『何時も椿さんだから私がお茶淹れますが

柘榴さんも飲みますか？」『知らん』的な会話しかしてないからだろうが。……後この二人が会話してるのを聞いたことは……ああ、そういえば菊が悲しそうに話していた。『ざつ、柘榴さん！その皆さん居ませんから一緒にいか、帰りませんか！？』『帰らん』っていう会話をしたと。

主にこの部は全員で帰るのがルールなんだが、偶にできないことがある。それは俺と桜さんと百合さんが委員会に入ってるからだ。約一ヶ月に一回委員会で集まりがある。…ついでに俺と百合さんは風紀。桜さんは図書だ。その為二人はその一ヶ月に一回は部員全員で帰ることができないのだ。

……まあ柘榴は数人でいるより一人でいたほうが静かで落ち着くというタイプだからそう返したのだろう。多分……

「…柘榴。お前少しは話せよ」

「……………無意味」

じゃねえから。会話を無意味なんていう奴俺は始めてみたぞ？と、部長なのに心なしが影が薄くなってきた感じがする桜さんに視線を移した。桜さんは俺達なんてほっぽって本を読み始めた。最初からそうしてくれよ。

そんな事を考えているとドンドンツと扉がたたかれた。百合さんが菊の淹れたお茶を啜って扉に視線を向けた。

「依頼人か？入ると良い」

その言葉に扉を叩いた相手は困ったような表情で入ってきた。

「野球部の試合に出てください！！」

その言葉に文字通り俺と菊と百合さんは固まり、何時も無愛想な柘

榴は眼を閉じて息を吐き…桜さんは目をキラキラさせた。

「勿論やるわ！」

と俺達全員が予想していた言葉を桜さんは大声で言った。

野球をしよう！

「誰か、何でこんなことになってるのか教えてくれ……」
俺の言葉に答えるものは誰一人居なかった。

ギリギリの人数で保っていた野球部が事故により四人が足を負傷、または腕などを負傷して使い物にならないらしい。で、明日試合があるらしくて棄権はしたくないということでは何部に依頼に来たらしい。

所で、この部は去年も同じような事が起きて試合を棄権したようだ。その前も棄権したようなのだ……。ということで今年の三年生は一回も試合に出ていないらしい。

呪われてないか？この部活

「スミマセン……うちの我儘で」

そういう一人の野球部員。ニコリツと笑った。

迷惑かかるかもしれないがまあ四人負傷で女四人が野球試合に出るので俺は見学だ。

ああ、良かった。

「じゃっ、齋藤桜、いつきまーす！」

ブンツとバットを振り回して言う桜さんに引きつった笑みを浮かべる俺達。

ああ、何もしでかさないでくれることを祈ろう。……桜さん。どうか何もしないでください！！
…俺達の祈りが祈ることはなく

桜さんは野球部の投げたボールを見事バットで当てて……

パリーンッ

桜さんが振ったバットはボールと一緒に見事、三階の教室の窓を直撃した。

…ついでに、今割った分の窓代は全て野球部の部費から出してくれるように。野球部の副部長がははーと乾いた笑みを浮かべながら言った。ついでに桜さんの表情には悪いのわの字もなかった。

「いやー、すつきりするわ!」

罪無き野球部よ……うらむなら何部じゃなくて桜さんを恨んでくれ。

「…は、はは。さすが花の部部长! 齋藤さん……これならきつと勝てる!」

引きつった笑みを浮かべながら言う野球部の部長、真影^{しんえい}さんは桜さんの投げたボールとバットを回収してきてガラスの破片で手を切ったのか血が出ていてなんかもの凄く申し訳ない気分になった。

「……あ、あの…真影さん。何なら俺が半分出しますが…（何部の部費から）」

「いやー、でもそれじゃ迷惑じゃないですか?（何部からなら喜んで…って言いたいんですが）」

口ではそれっぽい会話をしながら眼では何部からどうやって持つてこようかなんて話し合っていたりする俺達の耳に届いたのはやる気の声。

「うしっ、なら私もやろうか!」

そう言つてやはりバットを振り回すのは副部長、百合さんだ。

ついでに、この部のみんなは運動神経が良い。前に一度桜さんの提案でカン蹴りをやったがその時のみんなのすばやさと言ったら……とか馬鹿な事を考えているうちに野球部が百合さんにボールを投げた。

百合さんはコントロールが良いから平気だろう。

ほらっ、まっすぐ飛んでいった。

「わしのヅラがああっああっ!!」

…… まっすぐ飛んでいった野球ボールはだんだん速度を増して教頭のヅラを吹き飛ばして行った

「あの…百合さん？」

「失敗したな。申し訳ない…」

ああ、やっぱりこの人は素敵だ。

桜さんと違って悪いと思っている。流石桜さんのストッパー!!俺の女神よ!!アーメン!!

「馬鹿なこと考えてないか？椿」

「ななななっ、何でもないツスよ!?百合さん!」

「そうか。」

あ、それで納得するんだ。

所で野球部が全員涙を流しているのは何故だろうか

「勝てるっ!!これなら勝てるぞ!!初試合で初勝利なるかもしれない!!」

「くく!!花の部に頼んでよかったぜええ!!」

とか次々気持ちを口にしていく野球部。

…… 初試合…あれ?この野球部できたの何時なんだ?此处に入学したときに10年とか聞いたと思ったんだが。

「次は菊ね!頑張て!!」

その言葉にうっと言葉に詰まる菊。流石に野球は下手なのだろうか
とか思った俺の勘は的中した。

菊はボールが通り過ぎた後にブンツとバットを一回転させるのだ。思わず笑う一同。菊の顔は真っ赤だ。流石に膨れている。

「……………酷い酷い酷い酷い酷い酷い！！酷いです椿！！」

「は？俺？」

「椿です！」

……………なんでだよ。

「まあ一人ぐらいこんなのが居ても楽しいな。じゃっ、次は柘榴なっ！」

その言葉に静かに頷いた柘榴。

そつと右手でバットを握りたった。

……………アイツなら大丈夫だろう。

そう思った俺の勘は悲しいことに外れてしまった。

柘榴が打った球は見事に野球部員の一人の腕に直撃した。

「椿さん……………よろしくお願いしますね？」

そうだった野球部員に俺は本気で退部したいなと思いはじめた。

片手にバットを持った俺はこの部員の代わりに試合へと出ることに
なった。

俺に出きるか！？と思っていた試合当日 残りの野球部員が乗って
いたバスで事故が起きたらしい。

「残念ねえ……」

そっとう桜さん。俺はポツリッと呟いた

… 本当に呪われていないか？この部

ドタバタ美術部！

トントントントントと桜さんが机を指で叩く音。

俺はテーブルに座って今日の授業のまとめをしている。明日テストなんだよな……

見れば柘榴も向かい側で授業のまとめをしている。明日のテストは数学……

面倒くさいな……ん？

「桜さん、近いです」

いつの間にか桜さんが目の前に居て軽くビビったように顔を引きつらせる。

「暇よ」

「俺達勉強中です。菊がもうすぐ来ると思いますからもう少し舞っててください」

「舞えないわよ」

「魔っててください」

「悪魔の類？」

「馬っててください」

「馬？」

「マシユマロ食べててください」

「いやっ急に変わらないでよ！！！！？」

突っ込みいれる桜さんに面白いなあと思っただけかな表情をしている俺に柘榴が睨んできた。

まじめに勉強しろって顔だ。

いや別に親とか成績とか悪くても何も言わない人だから構わないがスラスラとノートにまとめると伸びをした。すると桜さんというには掃除当番だったらしい百合さんが大きな欠伸をしながら入ってきた。

「ふわああ……眠い……ん？椿も柘榴もテストでもあるのか？」

俺と柘榴を見てソファにかばんをほうり投げて言う百合さん。コク
コクと頷く俺と柘榴。

「さて、今日は何しようか……………ただ此処に居るだけじゃ部活にな
らんしな。」

ブツブツ呟く百合さん。百合さんは桜さんが暴走しないように今日
は何をするか考えるこの部の苦労人だ。

柘榴が思いついたように顔を上げた。鞆をゴソゴソッと弄って何か
を取り出した。

「何だそれ？」

「……………オセロ」

ミニオセロを取り出して無言で桜さんに渡した。百合さんが分かっ
たと頷いた。

あの二人がオセロやってるうちにまとめとけて事かあ……………柘榴よ。

「遅れてすみませんでし……………た？」

最後が疑問系なのは何故だ菊よ。

菊はまず桜さんと百合さんのしているオセロを見つめてから俺と柘
榴が始めた将棋に視線を移した。

まとめ終わったのは良いが二人が何時までもオセロをやっているも
んだからまた柘榴が鞆から取り出した将棋で遊んでいる。

にしても柘榴。お前のその鞆には何が詰まっているんだ。

「教科書類。桜先輩の為の暇つぶし類」

その言葉にそうかとしか答えられなかった。

……………有難う柘榴。俺が悪かったよ……………

「菊、お前もやるか？」

「私…その、将棋は分からないので見ているだけにします。」

そう言つて俺の座っているソファの後ろから身を乗り出した菊。俺は歩の駒を動かした。

柘榴も歩の駒を。次は金の駒を俺が動かす。柘榴は今度は香車の駒を二つ動かした。まだ敵陣に乗り込むのは早いだろうと唸つて歩の駒を一つ動かす。それと同時に動かした場所を角行に通られて角行を取られた。

「あああつああ待つたああ！！！」

「無理だ。椿は単純すぎる」

…うーそつだよ。百回はコイツとやったのに一度も勝てない俺だよ！！

そんなとき、ようやくオセロが終わつた百合さんと桜さんが菊に氣付いて笑いかけた。

「おつ、菊。来たのかぁ……」

「あ、百合先輩！！」

ソファから身を乗り出していた菊が慌ててペコリツと礼をした。

「今日はどうするんですか？桜さん。このまま遊びますか？」

どうせ今日もやることが無いのだろう。そう思った俺に告げられた言葉は予想と違つた答えだつた。

「うーん、今日は依頼が来てるのよ」

……………え？

「マジ…っすか？桜さん」

「本氣と書いてマジと読むわ」

「内容は何ですか……？」

俺と菊の言葉にふっふっふっふと笑つた桜さん。何かいい氣がしないのは俺だけか？

「美術部へ行くわよ」

「……何故だ？桜。」

ポカーンとする俺達。美術部…なんでだ？

「私と百合と柘榴と椿はほら、元美術部じゃない？中学のときオール5だったし。」

桜さんの言うとおりだな。え？何で桜さんがそんな事知ってるかって？中学が一緒だったからだよ。

「菊は帰り道で必ずポスター見るもの。」

菊のポスターは必ずっていうほど見られている。それほど絵が上手いって事だ。

「で、それを知っているあたしの一個上の美術部の先輩がね、二年に絵の書き方教えてくれていたのよ」

「……分かりました。」

まあ取り合えず何も起きないだろうと俺達はコクリツと頷いた。

「此処の線はまずこの形を……………」

俺と同じ年で俺の隣のクラスの水無月 茜に教えると有難うと呟いて俺から鉛筆を手に取り書き始めた。

「教えるのが上手いな、水仙は」

「有難うございます」

先輩から言葉をもらいニツコリと笑いながら礼を言って再び茜を見た。

お、これは上手い。どうやら俺は当たりを引いたようだ。茜のスケッチが終わりバケツを持って水淹れてくるという言葉をきいて俺は他のメンバーを見る。

桜さん＆二年生ペア

「だーからー！此処はこう書くって何回いえば分かるの！？」

「あのなあ！こうこうこう…じゃわかんねえんだよ！すっかりと言葉を使えー！！！」

「使ってんじゃない！あーアンタって馬鹿ねー！！！」

「ふざけんじゃねえよ！！この線をどうしたら上手く見えるかとか一年が分かりやすく教えてるのがお前の目にはみえねえのか！？」

「人は人！私は私よ！！！」

……………スミマセン、先輩。

百合さん＆三年生ペア。

「…有難う。百合」

「いえ、これも先輩のため……………あつ此处色を……………順調らしい。」

「あああああ！！ジャージが真っ赤に！！！」

「すっスミマセンッ！！先輩ー！！！！椿っ交代しろ！！嫌です。先輩。」

絵の具を零してしまった百合さんが三年生の先輩に土下座しかけている姿を視界の隅に追いついて次を見た。

柘榴＆一年ペア

「……………」

無言で鉛筆を手に紙に書く柘榴。一年は既に遠い眼をしている。

『ああ、何で俺はこの人なんだろっ』とか思っているんだろっな

……………

いや、顔が心なしか赤いから少しラッキーとかは思っていそうだ。
「……柘榴、胸見えてる」
俺の小さな呟きを聞き取った柘榴から空っぽのバケツが投げられてきた。

菊&三年ペア

「御免なさい御免なさい御免なさい御免なさいっっ！！！」
「あつ、いやその泣かないで？ほら、ジャージなんてすぐに洗えば良いじゃない？鈴川ちゃん。」
「スミマセンッ！！弁償させてくださいー！！いくらですかああああああ！！？」
「だから良いってばー！！！」

百合さんと同じく色つき水を零したようにで平謝り状態だった。
あの、先輩。御免なさい……後で洗剤届けておくんで。
…それも迷惑か

結局、今日の依頼もドタバタしたもので終わったようだ。

ドタバタ美術部！（後書き）

何かギャグが足りないな……というよりたんに分かりにくい話なのか。

http://hp23.zero.jp/bbs/kiji.php?uid=himitu&dir=382
&num=3&th=&unum=12
11640598305&mn=0

参加させていただこうと思っている企画ですー！
少しでも気になった方はアドレスコピって行ってください。

中間テストだ！

「てるてる坊主を作りましょう！！！」

突然桜さんがひらめいたように手を打っていった。

その桜さんの言葉に俺達はは？とあきれた顔をする。その反応に膨れる桜さん。いや、だって行き成りてる坊言われても。大体もう梅雨だし多分そんなの作っても意味が無いんじゃないか？今運動会の時期な学校もあるかもしれないが俺達の学校は基本的に十月。文化祭は九月。球技大会は十一月。七月は校長の趣味で作った花火大会があるが……六月に行事はない。

「別に晴れなくても良いだろ……」

「よくないわ！！」

「其の前に勉強をしろ」

あつ、間違えた。六月の行事は

好きな人が居たら見てみたい

中間テストがあつた。

俺達全員テーブルに座り、教科書やら参考書やらを広げている。ちなみに柘榴と百合さんは勉強時は眼鏡だったりする。

「えー？」

「成績悪くて困るのはお前だろう。」

「んー、つゝばき！勉強教えて？？」

そんな可愛く首かしげるのは犯罪でしょう！！！？桜さん。

そんな事を思っていたらギロリツと柘榴から睨まれた。おい、何で

俺の思うこと分かるんだよ。

髪をがしと乱暴にかきながらざああああああああああ
あああと外から雨の音が聞こえ、雨の音より音楽の方が好きな
俺達の部室には（この部室は去年廃部した部のものを使っていたりす
る）コンポがあり、其処からは菊が持ってきたアニメの曲が流れて
たりする。

「菊ってアニメオタクだったんだな。」

百合さん。酷い、アニメの音楽が好きだとしてもオタクはいきすぎ
だろう。

「ちつ違い…ません。」

違うのか。菊。

「うー……百合さんだって声優オタクなくせに！！！」

そういう話なのか？いやいや、百合さんが声優オタクって本当なの
か？良いな。そのギャップは良い！！…あれ？俺変態になりつつな
っていないか？

「悪いか？…柊榴は何だ？」

「漫画」

ポツリツと柊榴がノートに字を書く手を止めずに呟いた。おい、何
時からこんな話になった。

「今さっきだ、椿。お前は何かないのか？」

「ふっふっふ………決まっているでしょう！！俺はゲームオタ……」

「煩いわねー！！オタク話なんてどうでも良いじゃない！！！」

俺の言葉を遮ったのは膨れた桜さん。ああ、てる坊の話をスルーさ
れたからツマラナイんでスね。桜さん。

「ね？勉強教えてよー？椿。」

「百合さんに教えてもらったらどうですか？一つ下の俺にじゃなく
て」

「だって 百合殿しいんだもん。成績良いの分かるわ」

こんな話をしているが、桜さんは上位50名と張り出されるぐらい
頭が良いのだ。…といっても中学の頃ひょこんと結果見せてもらっ

ただけだが。序に百合さんは毎回一位。流石だ。だが上位50名は桜さんにとって中の中らしく、せめて25位には入りたいのが今回の目標らしい。…じゃあ勉強しろよ。

序にこれを言っていると自慢になるが俺は毎回一位か二位かそのどちらかだったりする。

ちなみにそのどちらかには柘榴の名前が入っている。

そういえば菊は……と振り向くとどよんとした雰囲気漂っている。

「菊？」

「……………柘榴。私にも勉強教えてください。」

涙眼で言う菊。俺はこっくりと頷いた。

こうして俺の菊と桜さん二人に中間テストが始まる前日まで教えることになった。

一年生 上位50名発表

一位 水仙 椿

一位 秋川 柘榴

49位 鈴川 菊

二年生 上位50名発表

一位 赤崎百合

五十位 齋藤 桜

この日から何部は頭が良いという噂が立った。
..... 菊は頭が良かったが桜さん。

貴方本当にギリギリでしたね

中間テストだ！（後書き）

誰か……私にギャグをください（エ

あゝめあゝめふゝるふゝる

何でもどんなことでもやります的な部だっ て毎回依頼が来るはずが
無い。

其の前に野球部、美術部と依頼が来た時点で凄いのだ。過去新記録
かっていうぐらい。(いや、ちゃんと依頼は来てたけどね！この部
を哀れに思った人が！)

それにこの部は依頼が来ないとやる事が無いのだから滅茶苦茶暇
なのだ。

「暇よ。遊びなさい椿」

「何処の女王さまですか。嫌ですよ、サーさん」

「誰!？」

「誰って貴方でしょう？ミスターサタン」

「いや!！私女だしてかサタンってなによ!？」

「あー、間違えました。ミスブランデー」

「いや、もう何がなんだか」

「じゃあ止めれば良いじゃないですかー？」

「ああ、そうね。帰るわ……っ って何でよ!？」

「……………遊ばれているな。桜」

俺と桜さんのやりとりを見て五月が終わるといふこの時期に熱いお
茶を啜りながら百合さんは呟いた。

……百合さん、見てるこちらが暑いんですがどうしたらいいんでし
ょうか。

…よしっ、百合さんも漫才に入れてやる!!

「ミス、ユリ。ああ、貴方は何故私を愛したのですか。私は貴女が
思うほど良い人ではないのに」

そつと百合さんの手を取ると百合さんは驚いたように目を見開いてふうつと息を吐いた。

ノル気満々だっ！百合さん！！

百合さんは桜さんのする本当に馬鹿なことは止めるが俺みたいなこんなお芝居みたいな馬鹿には意外とノってくれるのだ。

うん、良い人を先輩に持ったな。俺。

「勿論、分かってた。私だって……貴方が其の手を赤く染めてる事を……それでもっ私は貴方を愛してしまったからっ……」

「百合がノったー！！？」

思わず座っていた机から立ち上がってツッコミを入れる桜さん。俺はそのままそつと百合さんを抱きしめた。勿論芝居なので百合さんもノって俺を抱きしめ返した。

「っスマナイ、ユリ。私はどれだけ貴女を傷つけるのだろう。そう考えると、今分かれたほうが良いと思っってしまうんだ」

「嫌だっ！貴方を離れるくらいならっ……貴方のその赤い手を私がもらっっ！」

「軽くサスペンス来たー！！？」

その言葉にバツと百合さんから離れた。

「くっ……この私の商売道具をやるものか……っ！！」

「ならばっ、貴方を殺して私は死なん！」

「其処は私も死ぬでしょ！！？てか何で武器構える真似してるのよあんだ等……！！」

ぜえぜえとツッコミ疲れの桜さんを置いて百合さんは涙を流すふりをした。

「私が貴方と一緒に居ただけなんだっ！」

「だがっ……（ピーーーーーー）をしていて人を（ピーーーーーーピー）をしている俺をお前は愛してくれる筈が無いだろう！」

「公開できないこと言わないでっ！！てかこれだと軽くエロく思われるわよ……！！？」

「エロくないぞ？」

「知ってるわよ！」

そう言つて肩で息をする桜さんをほっぽつて俺達は椅子に座る。

「いやー、百合さん凄いですねー。」

「ふっ……………元演劇部をナメるな。」

いや、初めて知った事実なんです。そういつてまたお茶を啜る百合さん。ですから暑いですって。

「柘榴も菊も遅いのよね……………暇。」

「なら俺と漫才しましょうか」

「しないわよ！！てかあたしに馬鹿なことするなつて言うくせに椿の馬鹿なことにはノつてるのなんで？百合」

「人に迷惑かけないからだ。」

その言葉に反論ができないのかガクシツと肩を落とす桜さん。

「……………ツマラナイわ」

しょんぼりと窓の外を眺める桜さん。雨がさああああと降っている。梅雨が終わったら夏かあ

「ずっと思っただけこの部作ったこと自体駄目だったのかしら？」

「困っている人が居たらその人を助けつつ自分の楽しい事をしたかったんだけど…ね」

そんな事を言う桜さんに俺と百合さんは顔を見合わせて息を吐きながら笑みを作る。

「なーに言っているんだ？桜。お前が作った部なんだぞ？」

「そうですよ。桜さん…俺達を巻き込んだんですよ？きつちりやりましょう。作って三ヶ月で廃部なんて嫌ですし。それに梅雨が終わったら夏ですよ？やること増えるんじゃないですか？」

俺と百合さんの言葉でばつと顔を輝かせる桜さん。

くっ……その顔は反則だぁ……っ！抱きしめたくなる。

いや、俺男だし……そのなんというか……柘榴で慣れたといっても
やっぱりこういう顔は……

「椿」

ニヤリッと笑う百合さん。止めてっそんな顔で俺を見ないでくださ
いっ……！

「よしっ……！菊達が来たらカルタ取りをやりましょう……！」

「「行き成りすぎ」」

俺と百合さんのツッコミをくらいまたガクシッと肩を落とした桜さ
んが居た。

まあさっきの話も行き成りすぎだったんだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3619e/>

何部へようこそ！

2010年12月14日21時44分発行